

研究課題 (テーマ)	認知症看護における臨床判断能力尺度の作成と信頼性・妥当性の検討		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学科	助教	村上 章
研究結果の概要			
<b>【目的】</b> 本研究では、認知症看護における臨床判断能力尺度の作成と信頼性・妥当性を検討した。			
<b>【方法】</b> 先行研究から 55 項目の尺度原案を作成し、専門家会議とパイロットスタディを経て 54 項目へ修正した。その後、2024 年 7～8 月にかけて、Web 調査会社を通して看護師モニターにアンケートへの回答を依頼した。分析では、対象者の基本属性の記述統計の算出、尺度の天井・床効果の確認、I-T 相関分析による項目検討を行った後、Tanner の臨床判断モデルを参考にした確証的因子分析にて因子構造を検討した。その後、尺度全体と下位尺度の Cronbach's $\alpha$ 信頼性係数を算出し、基準関連妥当性の検討として既存尺度の SRS-A、TCSS、臨床判断力尺度との Pearson の相関係数を算出した。分析には IBM SPSS Statistics 29 を用いた。なお、本研究は、所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。			
<b>【結果】</b> 有効回答数 499 データを分析対象とした。尺度の 2 項目に天井効果が認められたが、項目の意味内容を踏まえて削除しないこととした。確証的因子分析では、認知症看護における臨床判断能力の 6 因子モデル (GFI=.904, AGFI=.882, NFI=.915, CFI=.947, RMSEA=.055) を採用した。認知症看護における臨床判断能力尺度は、「背景」「文脈」「気づき」「解釈」「反応」「省察」の 6 因子構造 24 項目となった。尺度全体の Cronbach's $\alpha$ 係数は、 $\alpha=.954$ であった。基準関連妥当性として、併存的妥当性に用いた既存尺度との相関は SRS-A ( $r=.383$ )、TCSS ( $r=.533$ ) であった ( $p<.001$ )。			
<b>【考察・結論】</b> 認知症看護における臨床判断能力尺度 24 項目は 6 因子から構成され、統計学的な信頼性と妥当性が検証された。6 因子は Tanner の臨床判断モデルの構成概念の内、臨床判断のプロセスおよび、臨床判断の基盤となる概念が含まれていた。本尺度は看護師を対象とした認知症看護における臨床判断能力の評価に活用できると考えられた。 上記の研究結果について、第 45 回日本看護科学学会にて発表し、意見交換を行った。			
今後の展開			
得られた知見について、論文投稿にて公表する予定である。			